

菜種は稲の収穫の後にまかれる裏作用の花である。幻想郷の冬は雪が深く実りは少ないが、搾り取った油は調理から照明まで、残った油粕は肥料として、紫雲英と並んで重宝される。いつもお世話になる油煙墨だつて、この菜種の油から作られるのだから頭が上がらない。

「稗田様、お久しぶりでございます」

後ろからついてきた麟の父親が、丁寧な頭を下げた。彼女の家は花屋をやっており、父が牽く荷車には大小の鉢と土が積まれていた。

「これからお店で種植えするの。そろそろ春告精^{リリーホワート}が来るだろうから」

「今からで間に合うの？ 今年は暖かかいつて言つたじやない。この陽気だとそろそろと言うより、今日明日来てもおかしくなさそうだけど」

「今日明日来てても良いように、今から植えておくのよ」

なんだかずいぶん悠長な気もするが、こと季節に関して花屋より正確な者はいない。花屋がいうからには、きつとそろそろリリーは姿を現すだろう。

幻想郷の春は春告精^{リリーホワート}と共にやつてくる。

彼女はほんの僅かな春の兆しを見つけ、その報せを周囲に伝えてまわる妖精である。一説によると、冬の間抑えられた春の力が、果たして具現化したのが彼女だと言われている。

いる。その証拠に、春に現れた彼女は妖精とは思えぬほどの力を持つ。下手に刺激すると大変な目に遭うが、種ですら一瞬で満開に咲かせてくれるのだから、花屋にとつては神様のような妖精である。

余談だが、彼女は春にしか姿を見せないため、今まで春にしか存在しない妖精だと思われていた。ところが、おとしの冬に紅魔館で開かれたパーティに行つたところ、なんと彼女まで招待されていたので驚いてしまった。会場にはリリーだけでなく、蛍の妖怪や秋の神様なども招待されており、季節感がまったく無かつたのを覚えている。以前メイド長がリリーを捜していたという噂もあつたし、節分の風習をどこよりも重視しているのも紅魔館だ。吸血鬼と季節には、何か深い関わりがあるのだろうか。

「――阿求ちゃん、聞いてる？」

「え……あ、なんだっけ？」

考え事をしていたら、彼女の話は全く耳に残っていないかつた。如何に求聞持の能力を持つ私とはいえ、聞いていない話を覚える事はさすがに出来ない。

「もう。……ま、いいわ。でね、菜の花畑がとつても綺麗だから、阿求ちゃんも一緒に見に行かない？」

「お、良いねえ」

先ほど見た龍神様の瞳は生糸のように白く、今日一日は